

二〇一五年はアフリカ拠点が熱い!

ケニアと長崎を舞台にした『風に立つライオン』映画化!

3月14日(土)
ロードショー

©2015「風に立つライオン」製作委員会

モデルは長崎大学の医師
アフリカ拠点も映画手助け

今年、一番の目玉になりそうなトピックが、名曲『風に立つライオン』の映画化。長崎出身のシンガーソングライター、さだまさしさんが一九八七年に発表したこの歌は、アフリカの大自然の美しさ、子どもたちとの関わりを題材にした楽曲です。

映画は、さだまさしさん自身がこの歌をもとに書いた同名小説が原作。監督は三池崇史さん、主演は大沢たかおさん。このほか石原さとみさんや真木よう子さんら豪華な顔ぶれで、昨年は長崎やケニアでのロケも敢行されました。一連の動きに、実は長崎大学アフリカ海外教育研究拠点（アフリカ拠点）が大きく関わっています。

拠点長である一瀬休生教授のお話です。

「実は、この『風に立つライオン』のモデルになったのが、長崎大学からケニアのナクルに派遣されていた柴田紘一郎だ。また、現地俳優のオーディションを拠点で行うなど、さまざまな支援を行っています。なんと映画に出演する職員までいるのだそうですね。

「アフリカ拠点職員の小谷昌之さんで、大沢さん扮する主人公の同僚医師役と聞きました。ネイティブの長崎人なので長崎弁はバッチリ(笑)。モデルになった柴田先生は一九七〇年代にケニアで活躍されましたが、映画では二十年ほど時代をずらして八十年代後半から現代にかけてのストーリーになっています。舞台はケニアと南スーダンの国境の町ロキチヨキオで、赤十字の野戦病院で働く日本人医師と少年兵とドッキングが出会います。銃傷りも心の傷が甚大なドッキングがやがて成長したとき、ある出来事が起こります。今はこれ以上は語れませんが、三月の公開が楽しみです」。



写真上／ロケ現場での一瀬拠点長(左)と、久しぶりにケニアを訪れた柴田先生。
下／三池崇史監督(左)と一瀬拠点長。一瀬拠点長が持っているのが映画のシナリオ。



医師役で映画に出演することになった長崎大学職員の小谷さん(左)と監督。なかなか様になっています!「私にとっては楽しい体験でした。アフリカ拠点で働いていてよかった!この映画で、アフリカでの活躍を志す人が増えてくれるといいですね」と小谷さん。

ビクトリア湖の魚でかまぼこ!
ケニアの水産業の
新たな展開の第一歩



アフリカ拠点は、ケニア在住の日本人会ともつながりが深いことから、先日日本人会による「ふれあいまつり」で、特製かまぼこをふるまい、大好評を得ました。実はこれ、ケニア西部にあるビクトリア湖で獲れたナイルパーチやティラピアを原料に作ったもの。奇をてらったわけではなく、ある計画の一端です。

一瀬拠点長のお話です。

「長崎大学では数年前から水産学部などがケニアの現地に入り、アフリカの水産業振興の方法を探ってきました。ビクトリア湖では魚の加工があまり行われず、うまく産業に結びついていません。ナイルパーチは乱獲しすぎて漁獲高が減っていることも問題です。それらを放置するのではなく、環境や水産資源に優しい漁法や養殖技術、そして加工することで新しい産業を興して地域の経済発展をうながそうと、試行錯誤しています。かまぼこ作りは、そのチャレンジの一つです」。

まずは日本人が食べて、そして中国や韓国など、練り物になじみのあるアジアの国からの企業参入をうながすデモンストレーションだったのです。ティラピアは日本でいうイシミダイ。かまぼこの食材としては上等すぎるのですが、味や菌ごたえは改良すればもっとよくなる、とも。魚の身以外にも、皮や骨などを使って新たな加工品を作るなど、今後「アフリカの魚」に焦点を当てた取り組みが期待されています。



丸がティラピア、四角がナイルパーチのかまぼこ

柴田先生らが活躍した医療協力プロジェクトに端を発し、現在ではJICAはもちろん、現地の多くの組織と連携しながら、熱帯病、感染症の研究を進めているアフリカ拠点。熱帯医学、国際保健にとどまらず、水産業や水の純化プロジェクトなど多角的なアプローチでアフリカの問題解決を進めるプラットフォームとして、その存在感はますます輝いています。

この曲に出会って青年海外協力隊を志したという人もいる『風に立つライオン』。今回の映画化をきっかけに、アフリカの大地で自分にできることを探そうという若い世代が一人でも二人でも現れ、長崎大学をベースにチャレンジしてほしいものです。

善意の『パトン』は、そうしてつながっていきます。